調査報告

『国立女性教育会館研究ジャーナル』投稿論文掲載者フォローアップ調査

羽田野慶子・河野梨穂子・渋谷典子・伊藤静香

要　旨

「国立女性教育会館研究ジャーナル」の投稿論文が男女共同参画に関する研究・実践に関わる人材の育成に果たしている意義を明らかにするため、2008年７月から８月にかけて投稿論文掲載者のキャリア形成に関するフォローアップ調査を行った。本稿はその調査結果の報告である。

本ジャーナルは1997年の創刊から年に１回刊行され、2009年で今号まで刊行された。創刊以来、特集（テーマ）論文、投稿論文、NWECの調査研究事業が組み込まれている。本文はその中の投稿論文に着目し、本ジャーナルへの投稿および論文掲載の意義を考える。

投稿論文は、会館の調査研究の充実を図るとともに、日本における女性教育の進展に寄与するために、会館の調査研究の成果および生涯学習に関わる国際的、学際的研究ならびに男女共同参画に関する実践的研究を掲載することを趣旨としており、論文、実践事例研究、研究ノートの３種を募集している。

創刊から2008年刊行の12号までに、合計49本の投稿論文を掲載してきた。投稿論文掲載者52名（共著者を含む）を対象に、郵送によるアンケート調査、および掲載者のうち８名へのインタビュー調査を実施した。アンケート調査は、Ⅰ掲載者の論文について、Ⅱ論文の投稿、掲載経験およびそのキャリア形成への影響、Ⅲ掲載者についての大きく３つに分けて質問を行った。インタビュー調査は、論文掲載者、実践事例研究掲載者の２つに分け、投稿理由と研究・活動の背景、掲載が自身のキャリア形成に与えた影響、そして社会への影響を検証する。また、掲載者たちが持つNWECへの期待を示す。

なお、本調査は国立女性教育会館を実施主体とし、NPO法人参画プラネットの協力を得て実施したものである。

キーワード：NWECジャーナル、キャリア形成、フォローアップ調査、投稿論文、実践事例研究

はじめに

『国立女性教育会館研究ジャーナル』は、国立婦人教育会館（当時）の開館20周年に当たる1997（平成９）年10月、『国立婦人教育会館研究紀要』として創刊され、年１回刊行されてきた。刊行の目的は、「当館が行う調査研究事業の成果を発表してその普及を図るとともに、国際化、情報化に対応した研究機能を向上させ、広くジェンダーの視点に立って生涯学習の研究・実践を行う人々に開放し、婦人教育の進展に寄与すること」である［大野　1997:2］。2001年、会館が「国立女性教育会館」に名称変更したのに伴い、第５号から『国立女性教育会館紀要』に、さらに2006年刊行の第10号から「開かれた学術雑誌としてのイメージを高め、より広く周知されることを目指して」［神田　2006:3］『国立女性教育会館研究ジャーナル』（以下「NWECジャーナル」と略記）に名称を変更し、現在に至っている。

NWECジャーナルでは、創刊以来ジェンダーの視

点に立った生涯学習の研究・実践に関わる投稿論文を広く募集し、2008年刊行の第12号までに合計49本を掲載してきた。そこで今回、本ジャーナルが投稿論文を募集することによって男女共同参画に関する研究・実践を担う人材の育成にどのような役割を果たしてきたのかを明らかにするため、投稿論文掲載者のキャリア形成に関するフォローアップ調査を行った。調査は2008年７月から８月にかけて、創刊号から第12号までの投稿論文掲載者52名（共著者を含む）を対象に、①郵送によるアンケート調査、および②掲載者のうち８名へのインタビュー調査として実施した。なお、本調査は国立女性教育会館を実施主体とし、NPO法人参画プラネットの協力を得て実施したものである。

1. 調査の概要

1. 1. 対象

NWECジャーナルでは創刊号から「論文」「実践事例研究」「研究ノート」の３種の投稿論文を募集してきた。第12号までの投稿状況は表１に示した通りである。１号当たりの投稿数は平均17.8本、掲載数は平均4.1本で、トータルの掲載率は23.0％となる。「論文」の投稿・掲載数が最も多くなっている。

NWECジャーナル第12号までに掲載された投稿論文49本の掲載者は共著者を含め、のべ58名となる。共著論文については、２名共著の場合は両名とも、３名以上共著の場合は筆頭著者のみとし、合計52名（うち１名は掲載２回）を調査の対象とした。

1. 2. 方法と内容

⑴アンケート調査

2008年７月、52名の対象者のうち、連絡先の判明した51名への記名式・郵送自記式によるアンケート調査を実施し、37名から回答を得た。調査内容は、投稿前の論文発表状況、投稿の理由、執筆から掲載までのプロセス、論文発表後の状況、掲載時および現在のキャリア、などである。

表２　アンケート調査実施概要

A）実施時期	2008年７月
B）実施方法	郵送配布、記名自記式、郵送回収
C）配布数	51件（注１）
D）回収数	37件
E）回収率	72.5%（注２）

（注１）　対象者52名のうち１名は連絡先不明のため配布不可
（注２）　D)/C)×100

⑵インタビュー調査

アンケート調査に続き、８月にインタビュー調査を実施した。調査対象者は、掲載時期のバランスを考慮し、論文と実践事例研究の掲載者を各４名、計８名とした。対象者の内訳は表３の通りである。調査内容は、学歴・学習経験、現在の仕事・活動、キャリア形成のプロセス、NWECジャーナル投稿について、NWECジャーナルへの期待、などである。

1. 3. 掲載された投稿論文の概況

掲載された投稿論文49本のうち、44本が単著、５本は共著論文である。45本は日本語、4本は英文による論文である。掲載者のべ58名の性別内訳は、女性50名、男性８名であり、女性の掲載者が約９割を占める。

表１「国立女性教育会館研究ジャーナル」投稿状況（1997～2008年）

号		創刊号	第２号	第３号	第４号	第５号	第６号	第７号	第８号	第９号	第10号	第11号	第12号	合計	掲載率(%)
発行年月		97.10	98.8	99.8	00.8	01.8	02.8	03.8	04.8	05.8	06.8	07.8	08.3		
提出論文数	論文	7	14	9	11	25	12	6	14	12	8	13	7	138	
	実践事例研究	1	1	1	1	5	7	2	1	0	6	2	3	30	
	研究ノート	2	8	3	4	4	2	1	4	1	3	7	6	45	
	計	10	23	13	16	34	21	9	19	13	17	22	16	213	
掲載論文数	論文	3	4	2	3	4	2	3	4	3	1	2	1	32	23.2
	実践事例研究	1	0	0	0	1	2	1	0	1	2	1	1	10	33.3
	研究ノート	0	2	1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	7	15.6
	計	4	6	3	4	5	4	4	4	5	4	4	2	49	23.0

※第11号までは創刊号を除き毎年８月刊行、第12号より毎年３月刊行となった。

表３　インタビュー対象者

ＩＤ	論文種別	掲載号	掲載時キャリア	現在キャリア	地域	性別
A	論文	1-4	大学院生・非常勤講師	大学教員	北海道・東北	女性
B		1-4	大学教員	大学教員	東海・北陸	女性
C		5-8	期限付き研究員	大学教員	近畿	女性
D		5-8	大学非常勤助手	大学教員	関東	女性
E	実践事例研究	1-4	大学教員	NPOスタッフ	東海・北陸	女性
F		5-8	女性センター（財団）職員	女性センター（財団）職員	近畿	女性
G		9-12	行政職員	女性センター館長	関東	女性
H		9-12	自主グループ	大学院生	関東	女性

以下では、２節でアンケート調査の結果の概要を示した後、３節でインタビュー調査の結果について、「論文」掲載者と「実践事例研究」掲載者に分けてそれぞれ紹介し、４節で全体の考察を行う。なお、本稿の執筆は「はじめに」と１節および４節を羽田野、２節を河野、3.1を渋谷、3.2を伊藤が担当した。

2. アンケート調査の結果

2. 1. 論文執筆・投稿から掲載まで

⑴専攻分野

NWECジャーナルは「ジェンダーの視点に立った生涯学習に関わる国際的、学際的研究ならびに男女共同参画に関する実践的研究」の論文を募集しており、投稿論文の専攻分野は多岐にわたる。論文に最も近い分野を質問したところ、「女性学・ジェンダー論」13名（35.1%）が最も多く、次が「社会学」８名（21.6%）である。他には文学、史学、法学、政治学、経済学、社会学、心理学、教育学など文系分野が多く挙げられており、農学や情報学といった理系分野も含まれる。多くの掲載者は各専攻分野を基盤として、女性学、ジェンダー論に焦点を当てていることがうかがえる。

⑵論文発表経験

NWECジャーナルで論文を発表する以前に、他の学術誌・紀要等に論文を発表したことがある人は37名中26名（70.3%）であり、約３割（11名）はNWECジャーナルが初めての論文発表媒体であった。論文発表経験のある26名のうち20名は査読付き論文を既に発表していたが、６名はNWECジャーナルの掲載が初めての査読付き論文であった。したがってNWECジャーナルで初めて査読付き論文を発表した掲載者は17名であり、回答者の半数近くにのぼる。

⑶他に投稿を検討した媒体

投稿した当時、全体の約７割に当たる26名はNWECジャーナル以外の投稿は検討していなかったと回答している。他に投稿を検討していた媒体としては、『女性学』（日本女性学会）、『教育社会学研究』（日本教育社会学会）が各２名、『女性学年報』（日本女性学研究会）、『家族社会学研究』（日本家族社会学会）が各１名、その他大学・研究所の紀要などが挙がっている。

⑷NWECジャーナルへの投稿理由

他の媒体ではなく、なぜNWECジャーナルに投稿しようと思ったのか、その理由としては、「自分の研究（あるいは活動・実践）を発表するのに最も適した媒体だと思ったから」（73.0%）が最も多く、「自分の研究をまとめ、社会に発信したかったから」（51.4%）、「査読付き論文の業績がほしかったから」（45.9%）、「国立女性教育会館が発行しているから」（48.6%）などが続く（複数回答）。「その他」の理由として多かったものは、指導教官や同期の教員に「すすめられたから」という意見であり、「学問ジャンルと実践ジャンルの融合であるジャーナルでよい」「他の学会誌とは異なり特化していない」「自分の研究分野に合う媒体があってよかった」とのコメントも寄せられている。

なお、NWECジャーナル投稿時に他の媒体にも投稿を検討していた11人中10人は、NWECジャーナルを「自分の研究（あるいは活動・実践）を発表するのに最も適した媒体だと思ったから」投稿したと回答している。

⑸執筆から掲載まで

回答者37名中34名（91.9%）が初めての投稿で掲載されている。そのうち査読により「修正の条件付きでの掲載」というケースが20名と最も多い。「修正の条

表４　ＮＷＥＣジャーナルへの投稿理由（ｎ＝37）

投稿理由	複数回答	一番の理由
自分の研究をまとめ、社会に発信したかった	51.4	18.9
自分の活動・実践をまとめ、社会に発信したかった	35.1	10.8
査読付き論文の業績がほしかった	45.9	16.2
自分の活動・実践への評価がほしかった	24.3	2.7
国立女性教育会館が発行しているから	48.6	0.0
編集委員の信頼性が高い	40.5	8.1
学会に入会せず投稿できる	32.4	5.4
自分の研究、活動・実践の発表に最適な媒体	73.0	32.4
その他	24.3	5.4
合計	―	100.0

件なしで掲載」は８名であり、「修正・再審査の条件付きで掲載」が６名である。２度目の投稿で掲載されたケースは３名で、そのうち１名は２度目の投稿で修正・再審査を経て掲載に至っている。

論文の執筆から掲載までのプロセスに関する感想としては、全体の８割（とてもあてはまる35.1%、ややあてはまる45.9%）が「論文の執筆に苦労した」と回答している。執筆後、掲載決定までの過程で論文を書く力が向上したという人は７割（とてもあてはまる27.0%、ややあてはまる43.2%）であり、全体の９割（とてもあてはまる64.9%、ややあてはまる27.0%）が査読審査のコメントが役立ったと回答している。査読審査のコメントが論文を書く力の向上に貢献していると考えられる。また、査読委員とのやりとりで自分の研究のテーマ設定に自信がついたという回答も全体の７割（とてもあてはまる32.4%、ややあてはまる43.2%）にのぼる。

2.2. 論文掲載後の経験

⑴入選論文報告会

入選論文報告会は、NWECジャーナルに掲載された投稿論文を一般向けに口頭発表する機会としてほぼ毎年設けられている。近年では、毎年夏に行われるNWEC主催事業「男女共同参画のための研究と実践の交流推進フォーラム」の会館提供ワークショップの一つとして実施している。投稿論文掲載者は一般参加者へ向けて論文の内容を発表し、ジャーナル委員がコメントをする。

37名中27名（73.0%）が入選論文報告会での発表を経験しており、そのうち９割（とてもあてはまる63.0%、ややあてはまる33.3%）は報告会での発表がよい経験になったと回答している。「委員のコメントが役に立った」（とても＋やや81.5%）、「プレゼンテーション力を試すいい機会になった」（同77.7%）、「参加者から自分の発表へ反応があった」（同71.3%）との回答も多い。また、「ほかの発表者と交流することができた」（同77.7%）、「ほかのワークショップに参加し、視野が広がった」（同59.2%）という回答も比較的多く、同じ号に掲載された者同士の交流を深めたり、論文報告以外の研究・実践発表に触れる機会ともなっている。ただ、「ほかのワークショップに参加し、ネットワークが広がった」（同37.0%）はそれほど多くなく、論文報告以外の場面で多くの人と交流を深めるには至っていない。

⑵掲載による自身の変化

NWECジャーナル掲載によって、自身に何か変化を感じたかを聞いたところ、「自分の研究に自信がついた」が全体の９割（とてもあてはまる21.6%、ややあてはまる73.0%）、「自分の活動や実践に自信がついた」が全体の８割（とてもあてはまる27.0%、ややあてはまる51.4%）であり、回答者全員がなんらかの形で「自信がついた」と回答している。「さらなる研究（あるいは活動や実践）の道が開けた」も全体の７割（とてもあてはまる29.7%、ややあてはまる43.2%）にのぼる。

⑶掲載による周囲の変化

NWECジャーナルへの投稿、掲載経験が、自身だけではなく周囲に与えた影響については、「周囲の人々の変化があった」(48.6%)、「なかった」(51.4%)と半々である。しかし、「周囲の人々の自分への評価が上がった」は54.1%と半数以上を占めている。具体的な変化として２人以上の回答があったものは、「仕事に誘われた」、「講演・執筆依頼を受けた」、「(論文が)資料として取りあげられた」、「(実践事例研究において）自分たちの活動の意義を再認識できた」、「研究自体や本人、組織への信頼度が上がった、認められた」などである。

2.3. 掲載者のキャリア形成

⑴掲載時年齢

NWECジャーナルに初めて投稿論文の掲載が決定したときの年齢は、20代後半６名、30代前半６名、30代後半６名、40代前半７名、40代後半８名、50代４名であり、20～40代の層から平均的に投稿されて

いる。最年少は26歳の大学院生、最年長は55歳の同じく大学院生である。

⑵掲載経験がキャリアに与えた影響

NWECジャーナルに投稿論文が掲載されたことで、自身のキャリア形成においてステップアップを図ることができたケースもある。論文掲載によって周囲からの評価が上がることはキャリア形成にもつながると考えられる。NWECジャーナルへの投稿、掲載経験が現在のキャリアに与えた影響として最も多かったものは「研究を発展させることができた」(64.9%)であり、次が「活動・実践を発展させることができた」(35.1%)である。また、「博士号を取得するのに役立った」(24.3%)、「就職するのに役立った」(21.6%）とキャリア形成に直接影響していることや、「研究助成を得るのに役立った」「他の媒体・団体等から、執筆や講演の依頼を受けた」（各21.6%)、「活動・実践が社会的に認められるようになった」（13.5%）など、資金の獲得や社会的な評価を高めることにも役立っている。

表５　掲載によるキャリアへの影響（複数回答、ｎ＝37）

	度数	%
1．博士号を取得するのに役立った	9	24.3
2．就職するのに役立った	8	21.6
3．昇格・昇進に役立った	2	5.4
4．研究を発展させることができた	24	64.9
5．活動・実践を発展させることができた	13	35.1
6．研究助成を得るのに役立った	8	21.6
7．活動助成を得るのに役立った	3	8.1
8．他の媒体・団体等から、執筆や講演の依頼を受けた	8	21.6
9．研究者として社会的に認められるようになった	1	2.7
10．活動・実践が社会的に認められるようになった	5	13.5
11．その他	9	24.3

⑶掲載時キャリアと現在キャリア

最後に、調査に当たって事前に収集した情報とアンケート調査で得られた回答をもとに、調査対象者52名全員の掲載時キャリアと現在キャリアを比較する。掲載時キャリアで、最も多いのは大学院生で24名(46.2%)、次に大学の専任講師・講師６名（11.5%)、非常勤講師４名（7.7%）である。行政やNPO等、研究職以外の職業を持つ人は７名（13.5%）で、うち６名は実践事例研究を投稿している。

現在キャリアは、大学教授７名、准教授・助教授９名、専任講師３名など、投稿時よりも教育機関のアカデミック・ポストにある人が増加している。非常勤講師も７名と増加した。大学院生は６名（11.5%）と減少したが、その内訳を見ると、NPOスタッフ等から新たに大学院に入学したケースが３名含まれている。

表６　掲載時キャリアと現在キャリア（ｎ＝52）

	掲載時		現在	
	度数	%	度数	%
大学教授	3	5.8	7	13.5
大学准教授・助教授	3	5.8	9	17.3
大学専任講師・講師	6	11.5	3	5.8
大学助教	0	0.0	2	3.8
大学助手	2	3.8	2	3.8
大学非常勤講師	4	7.7	7	13.5
大学研究員・研究協力員	0	0.0	2	3.8
大学職員	2	3.8	1	1.9
大学院生（注１）	24	46.2	6	11.5
民間研究所研究員	1	1.9	1	1.9
行政職員	2	3.8	1	1.9
女性センター館長	0	0.0	1	1.9
女性センター職員	1	1.9	1	3.8
NPOスタッフ	2	3.8	1	1.9
団体主宰	0	0.0	1	1.9
自主グループメンバー	1	1.9	0	0.0
弁護士	1	1.9	1	1.9
予備校講師	0	0.0	1	1.9
不明	0	0.0	5	9.6
合計	52	100.0	52	100.0

（注１）　掲載時キャリアの大学院生のうち１名、現在キャリアの大学院生のうち３名はNPOスタッフを兼ねる。
（注２）　複数の肩書きを持つ場合は本人が最初に記載したもののみを集計した。

3. インタビュー調査の結果

3. 1.「論文」掲載者のインタビューから

本項では、NWECジャーナルに「論文」として投稿・掲載された女性研究者４名へのインタビューを概観する。現在、人文科学分野の中でも女性学やジェンダー学といった分野では、研究者として職を得ることが困難な状況にある。果たして、NWECジャーナルへの掲載実績は、研究の実績となり、職を得ることに役立っているのだろうか。

⑴掲載後の研究実績等（キャリア）の形成と変化

今回、インタビューを依頼した４名は、掲載当時、常勤職が１名、非常勤職が３名であった。特筆すべきは、掲載後、非常勤職であった３名が常勤職となっていることである。それぞれのキャリアの動きを記していきたい。

Ａさんは、学部のころから女性学を教育された第一世代であり、NWECジャーナル掲載をもとに、キャリアアップを図った第一世代でもある。NWECの夏のフォーラムには大学２年生のときから参加していた。30歳のとき、NWECジャーナルへの掲載が決まり、出産をはさんで校正が届いた。このころ研究テーマに悩んでいたので、論文掲載は大きな励みになったという。とはいえ、そのときの身分は非常勤講師であり、ジャーナル掲載を一つの実績として常勤職を得たが、大学の中では、女性学は先細りの状況なので、職を得るには苦労したという。

Ｂさんは、特集テーマ「女性と人権」が、大学での担当講義と合致していたため、女性の同僚（教育社会学）に勧められて投稿した。日ごろの論文は、縦書き（日本文学）なので、横書きでの提出に苦労したという。専門領域外のため、キャリアに結びつけるというよりは、当該分野の専門家の批評を受けたいという気持ちで投稿したが、掲載という形で受け入れてもらえ、非常な励みになった。論文執筆に取り組んだことで、教育・研究にジェンダーや社会学の視点を導入でき、教育学部の教員としての視野が大きく広がったという。

Ｃさんは、大学卒業後、銀行へ就職したが、長時間労働により体調を崩し、この仕事を定年まで続けるのかどうか考えて退職した。その後、アルバイトをしながら大学（学士入学）受験のための勉強をし、研究者を目指すことを決意した。そのための資源と情報力については、母校の力が大きかったという。ただし、大学教員への就職は門戸がせまく、ポストが空かなければ求人がない。査読付き論文の実績を積み上げるため、NWECジャーナルに投稿した。掲載は確実にキャリアにプラスになっていると実感している。

Ｄさんは、大学生のときフェミニズムに出会う。研究テーマも大学時代から女性を対象としていた。大学院に入学後、博士課程を目指す。単位取得後、しばらく非常勤助手となり、その後、専任の助手となる。NWECジャーナル掲載は、査読付きの論文であることから、専任助手のポストを獲得するときにも役立った。査読のコメントを活かして、次の論文にも取り組むことができた。

以上の結果から、一人ひとりにとって、NWECジャーナルへの掲載がキャリア形成に直結していることが明らかになったといえよう。

⑵NWECへの期待と提案

「学生のころにNWECに出会い育ててもらった」と話すＡさんは、現在、地方の国立大学の教員である。個人的に資金があれば、大学生を夏のフォーラムに参加させたいと語っていたが、現実は厳しい。一方、同様に地方の国立大学の教員であるＢさんは、地方と東京との距離感を常に感じている。これまでのNWECジャーナル投稿者が集まる会があれば出かけていきたいと、投稿者のネットワークづくりを提案している。ＣさんとＤさんは、実績を積み上げるときに、査読付きであることが役立ったという。査読委員が魅力的であることが重要であり、今後もこの体制が維持されることを期待している。Ｃさんは、大学院生を対象とした企画を提案し、そのためには投稿者にできる限り建設的で親身なコメントを返すような査読のあり方も必要となってくると考えている。

さらに、ジェンダーの研究拠点としてのNWECそのものへの期待も高い。特に、地方の大学で研究に携わっているＡさん、Ｂさんからは遠方からでも参加したいと思うような研究者向けの企画やネットワークづくりの必要性を強調している。

⑶開かれた媒体

今回のインタビュー調査では、NWECジャーナルが広がりのある媒体であることが確認できた。特に、会員のみが投稿できる学会誌や大学独自の紀要などの媒体と比較して、さまざまな立場の人々が投稿し実績を得られる開かれた媒体であることが投稿者に評価されているといえよう。その背景には、査読委員が幅広い視野を持って選考に当たっている姿が浮かびあがってくる。

女性が研究者としてキャリアを積み上げ、研究を深化させていく過程で、NWECジャーナルが研究実績を「可視化」する媒体となっていることは確実である。今後は、NWECジャーナルの役割をより高めていくために、歴代掲載者のネットワークづくりなど、新たな展開が求められている。

3.2.「実践事例研究」掲載者のインタビューから

NWECジャーナルには「実践事例研究」というカテゴリーがある。自分が関わっている活動を「実践事例研究」として発信することは、研究者ではない女性にとって貴重な機会となっているのではないか。ここでは、実践事例研究が掲載されたことで、自分のキャリア形成と関わる活動にどのような影響があったのか、そして社会への影響を検証する。

⑴投稿理由と活動の背景

インタビューした４名の「実践事例研究」掲載者は、掲載当時それぞれ、大学職員、財団職員、行政職員、市民活動者であった。投稿理由としては、４名がそれぞれの理由を挙げている。

Ｅさんは自分の活動成果に手ごたえを感じ、その成果を発信したいと思っていたところ、NWECジャーナルのテーマが自分の活動のテーマと同じであったため投稿意欲がわいた。大学院での研究を終えたＦさんは、「修士論文を大学の先生に読んでいただいたところで社会に何の影響力があるのだろうか」と思い、「自分の研究に、一番関心を持って読んでもらえる読者がいるのは『女性国立教育会館研究紀要（当時）』しかない」と社会への発信を意識して投稿した。同じく大学院で女性学を学んでいたＧさんは、先生のすすめで投稿を決めた。NWECが主催した「論文の書き方講座」に参加して、「書いてみよう」と思ったのがＨさんである。Ｈさんは、自治体の調査研究に市民グループとして参加したが、自治体の都合で調査したものが活かされなくなったことを知り、グループの了解を得て結果をまとめ直し投稿した。

このように活動の背景により、投稿理由はさまざまであったが、共通した理由として「査読があったから」が挙げられている。大学院博士課程を目指していたＨさんは、査読結果に自分の論文の評価を求めた。Ｅさん、Ｇさんは、査読のコメントがとても参考になり、書き直して自分の文章がよくなる実感を持ったという。掲載者の査読に対する評価は高い。

また、学会や大学などの研究機関に所属していない実践者にとって、「実践事例研究」が投稿のしやすさにつながっている。インタビューした４名全員が「実践事例研究」というカテゴリーがあることがNWECジャーナルの評価すべき特色であると答えている。

⑵掲載後のキャリアの形成と変化

４名とも投稿する時点では、NWECジャーナルに掲載されることが自分のキャリアにつながる、あるいは活動が広がるということに対して多くは期待していなかった。しかし、今回フォローアップ調査を通して、掲載後の自分の活動を振り返るに当たり、NWECジャーナルへの掲載が自分のキャリア形成や活動の広がりになっていることを認識したという回答を得た。

たとえば、Ｅさんは、査読を参考に何度も文章を書き直すことで、自分の活動が整理され、自信につながった。行政職員のＧさんは、大学院での研究を活かしたいと長年希望し続けた女性関連施設への着任がきまった。大学院での研究意義が、NWECジャーナル掲載によって認められたのではないかと推測している。また、掲載論文を読んだある自治体から、パネリストの依頼があり、事例となった会のメンバーとともに活動を発表する機会に恵まれた。招かれた地域の女性たちとのネットワークも広がり、NWECジャーナル掲載の効果を実感している。社会発信することを目的に投稿したＦさんも掲載されたことにより、その目的を果たすことができた。その後、Ｆさんは再度実践事例を投稿し、２度目の掲載を果たしている。大学院博士課程を目指したＨさんは、受験の際には掲載実績を申請する規定がなく実績を反映させることはできなかった。しかし、「入選論文報告会」について「自分の活動をまとめて話す場を与えてもらった。他の掲載者と知り合えたことが後の活動とつながっていった。ネットワークは現在も続いている」と述べた。Ｈさんは現在、大学院博士後期課程で「女性とコミュニティ」をテーマに研究を続けている。

⑶NWECへの期待

実践事例研究の掲載者にとって、NWECジャーナルは「実践と研究をつなぐ役割を果たしている」と評価する声が多かった。Ｅさんは、近年広がっているNPOにおいて現場の活動を言語化し発信することが重要であると考えている。Ｅさん自身が、NWECジャーナルの投稿を通して自分の活動に自信を持つことができたので、NWECジャーナルによってそのような経験をできる人が増えてくることに期待している。Ｆさんは、NWECジャーナルの質の高さに期待する。論文に比べ、実践事例研究という投稿のしやすさはそのままに、査読があることで維持される質の高さも価値のあるものだという評価である。

こうした評価からNWECジャーナルを発行する国立女性教育会館は、地域で活動を実践する女性たちに

とって、個々の実践を意味づけ、交流を促すナショナルセンターとして存在しているといえるのではないだろうか。

⑷社会への発信の場

インタビューの結果から、「実践事例研究」掲載者にとってNWECジャーナル投稿という行為は、「キャリア形成のため」と意識されたものではないが、掲載によって自分の活動に自信を持つことができたり、活動が広がったりして結果的にキャリア形成につながるといえるだろう。近年、女性学を対象とした研究紀要は数多く刊行されているが、所属先を持たない市民活動などの実践者にとって、「実践事例研究」というカテゴリーを持つNWECジャーナルは貴重な存在であり、実践事例研究者を育てる重要な役割を果たしているといえる。

また、実践者として自分の活動を発信することは重要であり、社会への発信の場としてのNWECジャーナルの果たす役割は大きく、掲載者は意識の高い読者層とジャーナルの質の高さに価値を見出している。NWECジャーナルが質の高い社会への発信の手段として有効であることが今以上に認識されれば、「紀要」としての役割を超えた「社会へのインパクト」が期待できる媒体として、存在価値はさらに高まるであろう。

4. 研究と実践をつなぐ学術ジャーナル

NWECジャーナルは男女共同参画と生涯学習のための学術誌として、多くの女性研究者および実践者（一部男性も含む）の研究を社会に発信してきた。掲載論文の専攻分野は人文社会科学を中心に多岐にわたっており、また「実践事例研究」のカテゴリーを設けることで、学際的、実践的な論文発表の場として独自の存在意義を持っている。調査に回答した掲載者の約７割が他の発表媒体ではなくNWECジャーナルを第一希望として投稿しており、約半数はNWECジャーナルで初めて査読付き論文を発表する機会を得ていた。掲載者は論文掲載までのプロセスで自分の研究や実践への自信を得、多くの場合、査読付き論文としてのNWECジャーナルへの掲載が、その後のキャリアにプラスに影響している。大学院生など研究者キャリアの初期段階にあった人は、掲載から一定期間を経て、常勤のアカデミック・ポストを得ているケースもみられ、NWECジャーナルがジェンダー研究に関わる女性研究者にとって初期キャリア形成の一助となっていることがわかる。

一方、「実践事例研究」という独自の投稿カテゴリーを設けることによって、女性センターや行政で働く女性、NPOなどの市民活動をする女性など研究者以外の実践者にも、自らの実践を論文の形でまとめ、広く社会に発信する手段として活用されている。これらの場合も、仕事の幅を広げたり、新しい活動の道が開けるなど、結果として掲載者のキャリア形成にプラスの影響を与えていることが確認された。

「論文」「実践事例研究」いずれの場合も、「査読付き」の論文として発表できることが掲載者にとって重要視されており、今後も質の高い査読システムを維持していくことが求められている。また、研究者だけでなく広く男女共同参画に関わる実践者が活用できるためには、「実践事例研究」という独自の投稿カテゴリーを今後も維持し、「入選論文報告会」「論文の書き方講座」の実施など、投稿者を育てるような仕組みをさらに工夫し、活性化を図ることも求められるだろう。

女性教育のナショナルセンターとしての機能が期待される国立女性教育会館にとって、論文掲載という形で実践と研究をつなげることのできるNWECジャーナルを発行している意味は大きい。研究と実践の両面において男女共同参画社会の形成を担う人材の育成に寄与するため、独自の役割を発揮することが求められている。

〈引用文献〉

神田道子　2006 「第10号の刊行にあたって」『国立女性教育会館研究ジャーナル』第10号、p.3

大野　曜　1997 「創刊にあたって　国立婦人教育会館の調査研究の内容と紀要発行の意義」『国立婦人教育会館研究紀要』創刊号、1-2

（はたの・けいこ　前国立女性教育会館研究員、福井大学准教授）

（かわの・りほこ　国立女性教育会館事務補佐員）

（しぶや・のりこ　NPO法人参画プラネット代表理事）

（いとう・しずか　NPO法人参画プラネット常任理事）